

2024 年度入学試験問題

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の注意事項をよく読んでください。
その際、問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子のページ数は 29 ページです。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
4. 解答は解答用紙の問題番号に対応した解答欄ごとに1つだけをマークすること。
同じ解答欄に2つ以上マークすると無効となります。なお、解答用紙の番号は①～⑥まで記入してありますが、問題によっては解答する選択肢が6つ無い場合があります。
5. 解答は HB の黒鉛筆を使用すること。
6. 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを完全に取り除いたうえ、新たにマークし直すこと。
7. 問題冊子の余白等は自由に利用してかまいません。
8. 解答用紙を持ち出してはいけません。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

十七世紀に科学の第一人者がアルキメデスからニュートンに移るとともに、中心的学問内容にも変動が起こった。アルキメデスが主にたずさわったのは数学と実用数学（静力学など）であった。せいぜい純粹数学とその周辺部であったと言つてよい。

A、ニュートンの科学は自然哲学であり、その数学的諸原理であることが注意を引く。ここに古典科学と近代科学のブンスイ^(ア)レイがあるのである。ときどきアリストテレスが数学研究を一般的におとしたというような誤つた解釈が行われることがある。アリストテレスは数学研究を決して一般的には軽侮しなかつた。自然を数学的に記述できる、数学的手段は自然を描きつくせる、とするような考えを誤りとしただけなのである。

こういったアリストテレスの考えに挑戦する思想家たちが十七世紀に歴史の表舞台に躍りだした。「自然という書物は幾何学の言語で書かれている」と宣言した『偽金鑑識官』（一六二三年）のガリレオであり、「私は自然学における原理として、幾何学あるいは抽象的数学におけるのとは違つた原理を、容認もせず要請もしない」と書いた『哲学の諸原理』（一六四四年）のデカルトである。彼らはともに、前述の自然学の数学的記述についてのアリストテレス主義的な制限を突破するのに、原子論ないし粒子哲学的物質観を心に宿し、事物を構成する根源的物質は数学的に記述可能な性質を有しているという観念をもつていた。のちにジョン・ロック^(注一)によつて定式化される、大きさ、形など数学的に記述可能な性質こそ本源的な「一次性質」であり、色、臭いなど感覺的性質は「二次性質」にすぎないといった観念である（『人間知性論』一六九〇年、第二卷第八章）。

ニュートンの『自然哲学の数学的諸原理』は、このようなガリレオとデカルトの自然学思想を体現してみせた近代科学の最高傑作であつた。それは、二つの物体間の万有引力（いかなる物もある力によつて引き合うという考え）から、惑星の楕円軌道を導き出しただけでなく、彗星、月の軌道もすべて数学的に同様の軌道を描くことを計算してみせた。それだけではなく、林檎が地上に落下するのも同じ力のなせるわざであることを説き、ある物体の初速度を増大させてやれば、月と同等の人工衛星を打ち上げることすらできると述べた。微小世界も同一の原理で説明できるはずであるという推測をもカイ^(イ)チンした。

(1) ニュートンの提示した理論は驚くべき説明力をもっていた。この書の出現以降、あらゆる現象はその理論をモデルとして、同様に説明されるべきであると考えられた——こう言っても言い過ぎではないような思想的雰囲気醸成された。ニュートン自身は必ずしもこういった自然の機械論的説明に満足しえていたわけではないのであるが、B こういった雰囲気が一般的になった。ニュートンの業績は、古典経済学を体系化しはじめたアダム・スミスのような人にとっても一定の規範になったほどである。

十七世紀になって数学は思索の世界にだけあるのではなく、自然の世界も数学という言葉で記述されるべきであるとされた。近世科学は「高級職人」と「哲学者」の出会いから生まれただけでなく、数学者との合作でもあったわけである。

ニュートンが集大成したようなテクノロジー科学はたんに思想上の成果として学者たちの規範になっただけではなかった。それは政治的・社会的にも支持を獲得することができた。C、政治的・社会的に同様のエートス(注2)がすでに生成され着しつあったために、支持を得ることができたのである。これは、近代科学の生成も、公理的数学がギリシャの民主主義的政体と連動して生成した歴史的経緯と類比的にとらえられうることを教えてくれている。

このことをもって立ち入って論じてみよう。テクノロジー科学は十七世紀に登場した近代国家の中に受容された。何かを作れたりするという意味で有用であったから受容されたのだろうか？ 必ずしもそうではない。そう見るのは、きょうあ狭隘な実用主義的短見である。(2) テクノロジー科学はいわば「イデオロギー」として近代的政体に取りこまれたのである。

近代政治哲学の伝統はイタリアのニッコロ・マキアヴェッリによって始められたと言われる。彼の政治哲学は、政治的目的や理想をほとんど問題にしない。それは、与えられた状況下で君主がいかにして他の有力なライヴァルたちの(ウ)サジュツにかかって敗北することなく、人民にほどよく信頼され、すなわち恐れられすぎもせず、かといってあなどられもせず、統治できるかの技法について論ずる。『君主論』(一五三二年)は、君主の闘争手段として、法と力をあげているが、マキアヴェッリが主として考察の対象とするのは、力による統治である。彼によれば、君主は野獣性と人間性とを巧みに使い分け、ともかく勝利しなけ

ればならない。

D

、力の保持が重要である。「武装せる予言者は勝利し、武力なき予言者は破滅する」(第六章)の
が政治の冷徹な法則である。このような政治技法は、マキアヴェッリを待たずとも、およそ政治が存在してからというもの現実
に行われていたに違いない。けれども、彼は政治悪を現実には認容し、自分の名前で、一書をもって理論化をあえてした点でコウ
(エ)シをなすのである(レオ・シュトラウス『マキアヴェッリについての思想』一九五八年、序論)。

マキアヴェッリは、一言で言えば、政治におけるリアリストであった。彼の思想を英国で最初に評価した政治家の一人、
ベイコンはその著『学問の進歩』(一六〇五年)の中で書いている。「われわれはマキアヴェッリやその他の、人間はどんなこ
とをするかを書いて、どんなことをすべきかは書かなかった人々に負うところが大きい」。マキアヴェッリは実際、人間の現実
(Sein, ありのままの存在)について書き、理想(Sollen, あるべきこと)について書かない。古来、古代ギリシャの理想主義
(観念論)的哲学を創始したソクラテスも(したがって、彼の弟子プラトンもアリストテレスも)、キリスト教の教祖になった
イエスも、人間がいかに生きるべきかを説いていた。マキアヴェッリは人間がどのように現実にいるかを凝視した。認識
関心のレベルを一段下げて政治に取り組んでいるのである。

エルンスト・カッシーラー(『国家の神話』一九四六年)やレオ・シュトラウス(「政治哲学とは何か」一九五九年)は、マ
キアヴェッリの政治哲学とガリレオに始まる機械論的な近代自然哲学の類似性を認めた。近代政治哲学も近代自然哲学も、ほと
んどもっぱら「いかにして」(how)の問題——操作的・技術的問題——だけにかかわるからである。

近代自然哲学は機械論的であると言われる。機械論的自然像とは自然を機械として見る考えをいう。説明することが困難な生
命的、有機的なことから可能な限り排除しようとするのである。抽象的言葉づかいでは、「自然は微粒子の位置運動からな
る」と言いかえられる。デカルトは、宇宙が微粒子の集成で、それらを統御しているのは数学的自然法則であると見る、機械論
的宇宙像の最初の提唱者となった。数学と自然学における彼の最重要概念は「分析」であった。十七世紀には最もセイ(オ)チな機
械は機械時計であると考えられていたので、科学革命当時、自然は時計と類比的に見られた。しかし、十七世紀に自然総体を
「死んだ」機械と等値した思想家はいなかったはずである。デカルトですら、「分析」して到達して得られた自然は機械である

に違いないと考えたが、その逆の道をたどって、「総合」して得られる自然像が機械であるとまではあえて主張しなかった。人間の肉体はまだしも、精神を機械とは見なかったのが、その証である。自然は生きていないに違いないが、⁽³⁾とりあえず機械と見て、それにアプローチしようとするのが、テクノロジー科学の方法論的合意なのである。そうアプローチする方が、自然を理解しやすいからである。換言すれば、技術的に操作することが可能になるのである。その点で、テクノロジー科学はマキアヴェッリの政治哲学に実によく似ている。彼にとっては政治とは人民の統治の技術なのである。「いかにして」の技術なのである。マキアヴェッリのリアリズムは、前述のようにベイコンによって高く評価され、さらにホッブズ^(注6)によって近代科学的よそおいをほどこされた。ホッブズは国家を機械と見たのである。伝統的主権者（王権）は神秘的仮面をはがされ、国家をよりよく統治し、人民に安寧を提供しうるもののみが主権者に値するとされた。ホッブズにとって政治科学にアプローチする最も重要な概念は「分析」であった。彼によって、国家の成り立ちは個々人にまで分解（分析）され、こうした個々人の安全（最悪の事態としての突然の暴力死の回避）を保障してくれる政治システムはいかなるものであるかが探究された。こういうアプローチの仕方から得られる帰結は、⁽⁴⁾主権者は誰でもよい、したがって、政体は君主制でも共和制でもどちらでもよい、要は、人民に安定した生活を約束してくれば、政治の最低の役割は果たされる、ということである。このリアリズムの観点に立った政治科学は、誰にでも評価されるはずであったが、現実認識があまりに冷徹すぎたために、ホッブズは彼の先駆者マキアヴェッリ同様みなから嫌われた。今日でもあまりに正直すぎる者が嫌われの的になるように――。

近代自然哲学は、機械学Ⅱ力学を中軸にして成り立っている。近代政治哲学も、力の関係を論ずるという意味で、それもある種の力学である。近代自然哲学と近代政治哲学の統一はホッブズによって成しとげられた。彼はマキアヴェッリの思想的後継者であった。レオ・シュトラウスがいうように、「啓蒙はマキアヴェッリとともに始まるのである」（「政治哲学とは何か」）。

こうしてみると、王権神授説では主権がもはや維持できないと考え、社会契約説的な自己正当化を図る近代国家が、国家権力の中心部分に近代科学の学会をおき、「数理学」の天才たちを召し抱えたのも偶然ではないことが分かる。ロンドンのロイヤル・ソサエティ（「王立協会」とも訳される、一六六二年憲章制定）、パリの王立科学アカデミー（一六六六年創設）はそ

った近代学会の二つの主要なモデルであった。西欧化するロシアの象徴としてピョートル大帝によって建設されたサンクトペテルブルク科学アカデミーに所属して活躍した十八世紀数学の王者レーオンハルト・オイラーは、そういった才能ある「数学」の担い手の代表だった。彼はそのたんなる装飾品だったわけではない。近代絶対主義王権にとつてなくてはならない「イデオロギー」の中核だったと言っても過言ではないのである。「倫理から数学へ」のスローガンを掲げたわが福沢諭吉が、科学アカデミーの日本版、日本学士院の源流である東京学士会院（一八七九年創設）の初代会長であったのはたんなるエピソードにとどまるにしても――。

以上のような「マキアヴェリスティック」と言つてよい政治的・社会的背景が、それほど実用として役立つわけではない新進の近世「数学」を思想的・制度的に援助したのである。E、テクノロジー科学は、前述の複合的な思想的・社会的深層構造の上に成立した知的営為だったのである。

（佐々木力『科学論入門』による）

- (注1) ジョン・ロック——一六三二〜一七〇四。イギリスの哲学者。
- (注2) エートス——ギリシャ語。社会集団で共有され、それを特徴づける気風、慣習。
- (注3) レオ・シュトラウス——一八九九〜一九七三。ドイツ出身でアメリカで活動した哲学者。
- (注4) ベイコン——一五六一〜一六二六。フランス・ベーコン。イギリスの哲学者・政治家。
- (注5) エルンスト・カッシーラー——一八七四〜一九四五。ドイツの哲学者・思想家。
- (注6) ホッブズ——一五八八〜一六七九。トマス・ホッブズ。イギリスの哲学者。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①
⑤

- (ア) ブンスイレイ
- ① 容姿タンレイな人物
 - ② 南都ホクレイの寺々に参詣する
 - ③ 生産をレイキする
 - ④ レイホウ富士を拜む
 - ⑤ 親会社にレイゾクした立場

- (イ) カイチン
- ① チンジュツ調書を取る
 - ② 叛乱をチンアツする
 - ③ 部外者がチンニユウする
 - ④ 敗戦に意気シヨウチンする
 - ⑤ 買い物のおダチン

- (ウ) サジュツ
- ① 妨害によって計画がサテツした
 - ② 移動中サンサロに行き当たった
 - ③ サカンの技術を学ぶ
 - ④ 測定ゴサの大きさに戸惑う
 - ⑤ 舌先三寸で重要書類をサシユされた

- (エ) コウシ
- ① シン奮迅の働き
 - ② サクシ策に溺る
 - ③ 相手をベツシする
 - ④ 敵にイツシ報いる
 - ⑤ シヨシ百家の思想

- (オ) セイチ
- ① 人類のエイチの集積
 - ② 思想と行動がハイチする
 - ③ テンチ開闢の神話
 - ④ チキにあふれた行動
 - ⑤ チミツな計算に基づいた行動

問2

空欄

A

く

E

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号はA—6、B—7、C—8、D—9、E—10。

- ① そして
- ② 他方
- ③ ようやく
- ④ というより
- ⑤ ともかく
- ⑥ それゆえ

問3

傍線部(1)「ニュートンの提示した理論は驚くべき説明力をもっていた」とあるが、ここでいう「説明力」とはどのような「力」か。その説明として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は11。

- ① 極大世界も微小世界も同じ原理で統一的に説明できるといふ推測に説得性を与える力。
- ② すべての事象の解釈のモデルは、物理的な運動法則だといふ知的雰囲気を作り上げる力。
- ③ 世界や宇宙に実在する多様な存在のあり方を、特定の法則で統一的に把握できる力。
- ④ 物体の運動法則を見事に解明したことで、他の分野の学問にも大きな影響を与える力。
- ⑤ 自然界に実在する多様な物体の運動を、すべて同一の原理で合理的に理解できる力。

問4

傍線部(2)「テクノロジー科学はいわば『イデオロギー』として近代的政体に取りこまれた」とあるが、そのようにいえる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 理想よりも現実を直視しようとする近代政治哲学と事実の探求をその役割とするテクノロジー科学は、いずれも現実を技術的に操作しようとする際に有効であり、その点で国家が科学を評価したから。
- ② 役に立つか立たないかということより、対象を操作の対象として捉える点で近代政治思想とテクノロジー科学は類似しており、両者はそれが発展した時代の精神を共有していたと考えられるから。
- ③ 近代政治哲学とテクノロジー科学には思考の様式の共通性が見とれ、後の歴史的展開を見ると近代国家が自己の正当性を主張するためにテクノロジー科学を思想的・制度的に援助したと考えられるから。
- ④ 近代政治哲学とテクノロジー科学は同じ時代精神の具現化であり、両者はともに対象のありのままの姿をとらえようとする姿勢を基盤に対象を技術的に操作しようとする点で共通するから。
- ⑤ 近代国家がテクノロジー科学を思想的・制度的に支えてきたという事実は、近代国家が自己の正当化を図るためにテクノロジー科学の成果を利用し、科学のほうも国家に依存して発展してきたことを示すから。

問5 傍線部(3)「とり、あえず、機械と見て、それにアプローチしようとする」とあるが、どういうことか。その説明として最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 自然を技術的に操作するために、微粒子の集合体が数学的自然法則で統御されたものとして自然現象を解明しようとする方法論的合意。
- ② 生命や精神といった説明困難なものは問題とせず、機械的に説明可能なものを厳密に説明することで自然をとらえていくとする態度。
- ③ 自然の姿をとらえるために、当座の方法として機械に喩えられるメカニズムとして分析し、その理論を延長しようとする学問的姿勢。
- ④ 自然への明確な認識を得るために、自然の全体ではなく、時計などの精密な機械に類比できる側面にのみ着目して分析しようとする姿勢。
- ⑤ いかにして自然を利用するかに特化した、微粒子が機械的に数学的自然法則にしたがって運動しているのとらえる機械論的自然観。

問6

傍線部(4)「主権者は誰でもよい、したがって、政体は君主制でも共和制でもどちらでもよい」とあるが、どういことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 目標の達成こそ政治が存在する理由であり、統治形態や国家主権の保有者がどのようなものであっても実力でもって目標を達成できれば政治は肯定されるということ。
- ② 政治で重要なのは現実的な成果であり、政体の種類や主権の所在は手段に過ぎないので手段の正当性は問題ではなく、明確な目標を立ててその達成に邁進すべきであるということ。
- ③ 人間社会の現実を見れば政権は力によって保証されるのだから、政体について君主制と共和制との間に現実的な優劣はなく、主権者の正統性も問題とならないということ。
- ④ 政治とは結果がすべてであり、人民の生活を守るといふ目的が達成されるならば、君主制であろうが共和制であろうが統治の形態の是非を問う必要はないということ。
- ⑤ 主権者が誰であろうが、政体がどのようなものであろうが、国家の存続繁栄というもつとも重要な目的を果たせさえすればすべて正当化され人民に支持されるといふこと。

問7

本文の内容と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。解答番号は 15 ・ 16。

- ① 十七世紀以前の古典科学とそれ以降の近代科学とは、数学的原理を基礎においた研究を行なっているかどうかという点で明確な区別ができる。
- ② 近代自然哲学は研究の対象である自然を精密な機械とみなし、そのメカニズムを解明することで自然を技術的に操作し利用する方途を拡大していった。
- ③ マキアヴェッリの政治哲学は、古来から実践されてきた政治のリアリズムを踏まえ、それを発展させることで近代政治哲学を予見する理念となった。
- ④ 近代政治哲学とテクノロジー科学は同じ時代精神を体現しているが、近代国家が科学の学会を保護することで政治が主導するという関係となっていた。
- ⑤ 力学を中軸とした近代自然哲学と統治を力学的関係として認識する近代政治哲学とは同じ時代の双生児といえるが、理想を問題としない点にその限界がある。
- ⑥ 目的手段の合理性を重視したマキアヴェッリやホブズは、人間の現実に立脚した統治の理念を提唱し、近代政治哲学の一つのモデルとなった。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

世界大戦によって引き裂かれた人間精神が、終末状況のなかでバラバラになった世界の断片を蒐集、びほう弥縫し、全体的イメージとして繋ぎ止めるアートをG・R・ホッケは「マニエリスム」と呼んだ。単なる美術様式としてルネサンスとバロックのあいだに咲いた徒花わらわらではなく、人類の歴史全体に普遍化可能な、終末状況に繰り返し立ち現れる「歴史的常数」と定義されたのである。

またホッケはシュルレアリスムやダイズムその他、前衛芸術運動が百花繚乱した一九二〇年代モダニズムをマニエリスム復興期と見なしていた。(注2)T・S・エリオットがおびただ夥しい古典文学からの蒐集・引用で成り立つモダニズム詩『荒地』(一九二二年)を発表したのも、美術史家マックス・ドボルシャックが『精神史としての美術史』(一九二六年)でエル・グレコ批評を通じてそれまで蔑称でしかなかったマニエリスムの再評価を促したのも、この一九二〇年代である。

(注4)この年代にオダム『黒人とその歌』が出たこと、そして「悪魔、罪人、終末、死」といったモチーフに価値を見出したことは、倒錯芸術たるマニエリスムの歴史的展開の必然なのだ。(注5)次章で紹介する「アメリカの平賀源内」と呼ぶべき奇才(注6)ハリリー・スミスもまた、第二次大戦後の精神的荒廃を経てファンタスティックな想像力が爆発するルーツ音楽集《アンソロジー・オブ・アメリカン・フォーク・ミュージック》を編んだ。こうしたオダムやスミスのような音楽蒐集狂が出現したことは、逆説的に世界の断片化と再統合⇨マニエリスム化の欲望を物語る。危機意識の表れとしてのコレクションなのである。

ホッケはマニエリスムの誕生は、一五二七年のいわゆる「ローマ劫掠」サッコ・デイ・ローマの惨状(強姦、殺戮、破壊が蔓延し、教皇の墓さえ乱暴に暴かれた)がもたらしたと喝破している。「一九一四年が古きヨーロッパの死の年であったのとまったく同様に、一五二七年とともに、ある宿業の日付が、すなわちルネッサンスの終息が記されるのである」。永遠のローマが滅び去り、世界は断片化する。散り散りになった亡命芸術家たちは、かつての栄光の記憶をなぞるように、(注7)フラグメントをかき集めた蒐集芸術としてのマニエリスムを始める。(1)このヨーロッパ精神の崩壊が、母なるアフリカ大陸から引きはがされた新大陸黒人奴隷たちの精神に適用

できよう。人間の精神は、人種によってそれほど違うものだろうか？

こうした黒人奴隷の置かれたマニエリスムの状況は、「円」から「楕円」への心理的変容をもたらす。内なる宇宙が、中心をもった円の安定構造から、二焦点をもった楕円の不安定構造になるというのがホッケのルネサンスからマニエリスムへの移行を説明する図式だった。この移行はアフリカからアメリカへの黒人奴隷の移動に対応していて、黒人霊歌にはその引き裂かれた魂が楕円形に刻印されている。

黒人霊歌は「スピリチュアル」と呼ばれるように、宇宙との調和や共同体の一体感に根差している。わざわざ西アフリカ神話の宇宙観を持ち出さずとも、奴隷共同体に凝集力を与える意味で霊歌は小宇宙を形成するものだ。

I

(注8) キング牧師とも行動をともにした黒人神学者ワイヤット・T・ウォーカーは以下のように語っている。

彼らに共同体感覚を与えたのは、他の何よりも奴隷たちの音楽であった。そこにはだれでも参加することができたし、さらに霊歌の形式と演奏は X なるものであった。ワラムは「集団の中のだれかが歌えなければ、彼は足を踏み鳴らせばよかったし、もし足を踏み鳴らすことができなければ、頭を揺らせばよかった。また頭を揺らすことができなかったら、彼は見ていれればよかった」、と述べている。

第5章で見るファンカデリックというPファンクバンドが「(注9) グルーヴのもとに一つの国家を」といって、音楽による小宇宙形成を目指したこともあわせて指摘しておきたい。ジャズ評論家ジョン・スウェッドは、こうした音楽を中心に黒人共同体ひいては全宇宙を調和させるような黒人伝統を「ネオ・プラトニズム的」であるとしている。

しかし先述したように、この黒人霊歌の形成する小宇宙は、古典主義的なプロレマイオス宇宙観——神なる中心によって統御された「一」なる安定宇宙——では既になく、ケプラーによって宇宙の楕円構造が発見された後の、焦点に引き裂かれた「二」

なる不安定宇宙なのである。

人文主義者エラスムスがローマ劫掠を「これはローマ市の没落ではなくて、世界の没落であった」と断じたのと同様の「没落のヴィジョン」(ホッケ)が、きつと奴隷制下のアメリカで暮らした黒人奴隷には感じられたに違いない。西アフリカから連れてこられた奴隷は各民族集団から引き離され(言語が異なる民族同士なら謀反の心配も少ないため)、家族は離散し、「アフリカの魂」(ヤンハインツ・ヤーン)はバラバラに解体された。その断片化した記憶をクレイジー・キルトのように縫い合わせ、新大陸で伝承していくことがアフロ・アメリカンの芸術伝統である。本書で「アフロ・マニエリスム」と呼ぶものである。在日朝鮮人問題やパレスチナ問題など民族的マイノリティへの深い見識を持つ四方田犬彦が、「忘却は逃走、記憶とは闘いである」と書き、さらに『蒐集行為としての芸術』と題する書物を著したことはおそらく偶然ではない。

バラバラになったものを寄せ集めるマニエリスムの身ぶりは、引き裂かれた主体の精神安定であり、記憶の維持のためである。これはビーズ・貝殻・金属片などの配列によって、王家の成り立ちといった民族の集合記憶を伝える西アフリカのルバ族の記憶盤「ルカサ」から、クレイジーキルトの伝統、そしてヒップホップのサンプリング・カラージュまで一貫した黒人伝統だ。

II

ホッケの円(ルネサンス)から楕円(マニエリスム)への移行図式は、決してヨーロッパ精神に限定されたものでなく、新大陸に渡った黒人奴隷にも当てはまることを黒人神学者ジェイムズ・コーンの以下の箴言からも導出できよう。「黒人音楽は統一性の音楽(unity music)である。それは黒人の喜びと悲しみ、愛と憎しみ、希望と絶望を結びつける」。

先の黒人霊歌で見たように、⁽²⁾ 未来は常に終末に、生は死に結び付けて表現される。それは単なる矛盾ではなくマニエリスムの要諦ともいえる「対立物の一致」^{コインシデンティア・オポジトルム}を果たしているのである。思想家の花田清輝は二焦点に常に引き裂かれた人間精神のありようを「楕円幻想」と呼んだ。この止揚しがたい矛盾のなかを生きる飽くなき闘争が、黒人音楽のフィーリングを産むと断言してもよい。ホッケが『絶望と確信』で「イデアー芸術」(要するにマニエリスム芸術)について残した以下の言葉は、楕円幻想を抱え込んだ黒人霊歌の説明にも聞こえる。

III

ここには〈中心〉というものがまったくあり得ない。だが一個の円はあり、それは依然として多様なもののための包括的存在なのだ。それは〈人間的なるもの Das Humane〉を、絶望と確証との間のその諸関係のあらゆる音色において、しかも静力学的ではなく動力学的なあり方において、とはつまり幾何学的であるよりは宇宙韻律学的 (Kosmometrisch) なあり方において包括する円なのである。

この「一個の円」とは楕円であり、黒人霊歌は「宇宙韻律学的 (Kosmometrisch)」な響きでもって、二焦点に引き裂かれた黒人主体の「〈人間的なるもの Das Humane〉」をかりうじて繋ぎ止めるのである。

IV 黒人思想家 W・E・B・デュ

ボイスは『黒人のたましい』のなかで、アメリカ人にして黒人という意識の引き裂かれた状態を「二重意識」と表現している。「二つの魂、二つの思想、二つの調和することなき向上への努力、そして一つの黒い身体のなかでたたかっている二つの思想」と表現されるこの二重意識とは、花田清輝が『復興期の精神』で言った「楕円幻想」に他ならない。

なお『黒人のたましい』を訳した黄寅秀^{ファンインズク}は、在日朝鮮人としての自らの二重化した出自をデュボイスのこの「二重意識」で把握したと、ヤンハイイツ・ヤーン『アフリカの魂を求めて』の訳者あとがきで明かしている。そしてヤーンの翻訳書の版元であるせりか書房の編集人・久保覚^{さとし}もまた、在日朝鮮人としての己の出自と終生戦った人物である。その久保が日本出版界の伝説的偉業と目される『花田清輝全集』（講談社）を編纂したことも偶然ではないだろう。二重意識とは楕円幻想なのである。本書がテーマとするのは、故郷喪失者や亡命者が必然的に抱え込む「二重意識」と、そこから生まれる引き裂かれた精神の紡ぐマニエリスムの系譜である。

さて、黒人霊歌をマニエリスムという闇の分裂表現と結びつけたことで、いよいよ「暗号」や「韜晦^{とうかい}」のテーマが浮上してくる。世界不安の緊張感のなかで、おびただしい隠喩を駆使して自らの身を守った一六世紀マニエリスム・アートの翬^{ひそみ}に倣うようにして、恐怖のなか黒人霊歌は「地下鉄道^{注13}」という秘密結社と絡み合っ^{メタフォラ}て隠喩濫溢劇場の様相を呈していく。

V

黒人霊歌の秘めた「暗号」の具体的な内容に入る前に、そうしたものが生まれるそもそもの奴隷の心理状況を考察したい。ジエームズ・コーンは「あざむき」を主たる理由として挙げる。

抑圧社会において生き残つていくためには、抑圧者よりも利口になって、彼らに、奴隷が彼らがそうでないと思つてゐる通りの者であると思ひこませることが必要であつた。それは、奴隷が黒人と白人についての彼らの規定を受け入れてゐると信じこませることであつた。ある歌はそれを次のように言い表してゐる。「わたしの一つの心はボスに見せるため。だが、もう一つの心はわたしだけのためのもの」。

この黒人の仮面術は、MFドゥームという鉄仮面をつけた黒人ラッパーにまで連綿と受け継がれてゐる黒人秘伝の術である。イタリアの画家パルミジャーニョの「自画像」に見られる仮面のような無表情は、典型的なマニエリストの相貌であり、その口元に残る微笑は貴族的余裕の表れである。

しかしこの余裕しゃくしゃくとした凸面鏡内に、黒人奴隷の居場所はあるのか？ ホッケの貴族的マニエリスム観を闇市の浮浪児の感覚で社会底辺から湧き上がる活力として捉えなおした種村季弘、そしてその路線を押し進め、生きる、生きる、それ自体をマニエリスムと見なした高山宏の視点を導入することで、「黒人奴隷のマニエリスム」を考へることが初めて可能になる。パルミジャーニョの無表情の仮面も、黒人奴隷のそれも、危機的状況にいかに対処するかを内面で高速処理する邪魔をされないための外面的措置である。⁽³⁾嘘をつくことは必ずしも悪ではない。「正直すぎると死ぬことさえある」と言つたのは『仮面の告白』の三島由紀夫だつた。

またコーンは、「抑圧的社会においては、もし存在への意思表示が存在をおびやかす場合には、だますこと、つまり「存在しないように」よそおうことが必要である」とも書いてゐる。騙し、隠れおさせることは、ときに生き残るために必要な術であ

る。奴隷制時代の南部プランテーションでは、礼拝場所をもたなかった黒人奴隷は、野外の隠れ場や、納屋や物置の隠れ家などといった集会場所を「見えぬ教会」^{インヴィシブルチャーチ}と呼び、被抑圧人種としての結束力・団結力を強めた。『見えぬ人間』で作家ラルフ・エリソンは黒人存在が白人社会に認知されないことの被害を訴えたが、もつと過去に遡って奴隷制時代においては、進んで「見えぬ人間」になることが黒人の生存術だったわけである。またこの飽くなき生存への意志は、黒人奴隷の死の観念とコインの裏表になっていることをジェイムズ・コーンは見抜いていた。

死は Y の象徴であり、存在の完全な抹殺の可能性である。黒人奴隷は死を恐れた。なぜなら、彼らは死を生の反対物、したがって悪であるときみなしたからである。それゆえ、彼らの精力の多くはただ存在しようとする努力に、また非存在の包みこもうとする力を避けようとする努力についやされた。

生きるか死ぬか、サバイバリストとしての生存本能、それは黒人奴隷制の時代からギャングスタ・ラップの時代にまで通じる、黒人精神史の常数であると言える。死ぬことを美化したり、豊かな意味を見出すような白人エリート^(注14)のデカダンスは(第6章で扱う「ホラーコア」出現以前の)黒人奴隷には縁遠いものであった。黒人霊歌は彼岸の理想を歌うものであると同時に、現実に迫りくる奴隷主の鞭や、首つりの脅威から身を守る実存的な「韜晦」にもなるのは当然であろう。

そして歌うことは秘匿^{シクリン}すると同時に治癒^{ヒーリング}の効果もあった。黒人神学者ワイヤット・T・ウォーカーは次のように語る。「奴隷たちは言葉で公には言い表せない事柄を、歌で装って表現し、彼らの人間性の重要な部分を傷つけられずに保ち、かつ彼らの希望を生かしつづけたのである」。

(後藤護 『黒人音楽史——奇想の宇宙』による)

(注1) G・R・ホッケ——一九〇八—一九八五。ドイツの美術史家、ジャーナリスト、文学研究者。

- (注2) T・S・エリオット——一八八八〜一九六五。アメリカ出身の詩人、文芸評論家。
- (注3) エル・グレコ——一五四一〜一六一四。クレタ島出身の、マニエリスム後期を代表する画家。
- (注4) オダム——一八八四〜一九五四。ハワード・オダム。アメリカの社会学者。
- (注5) 次章——本文の出典『黒人音楽史』の第2章。以下、本文中の「本書」「第5章」もこの出典および章を指す。
- (注6) ハリー・スミス——一九二三〜一九九一。アメリカの画家・音楽家・詩人・評論家・学者・哲学者・奇術師。
- (注7) フラグメント——断片。
- (注8) キング牧師——一九二九〜一九六八。アメリカの黒人解放運動・公民権運動の指導者。
- (注9) Pファンク——アメリカの黒人音楽家ジョージ・クリントンが率いた二組のバンド、パーラメントとファンカデリックおよびその構成メンバーによるファンク音楽のこと。
- (注10) ヤンハイイツ・ヤーン——一九一八〜一九七三。ドイツの作家。
- (注11) クレイジー・キルト——土台布の上に不規則に布を縫い付け、刺繍を施したキルト。
- (注12) サンプリング・コラージュ——過去の曲や音源の一部を流用し、それらを組み合わせる新しい楽曲を作る音楽製作法や表現技法。
- (注13) 地下鉄道——十九世紀アメリカ南部の黒人奴隷たちが、奴隷制の廃止されていた北部諸州やカナダに亡命することを援助した組織。
- (注14) ギヤングスタ・ラップ——暴力的な日常を主題としたラップ音楽。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1

本文中の空欄

I

く

V

のうちで、次の文を補う箇所として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は

17。

黒人奴隷の原初的^{プリミティブ}のアーティストのように思われていた黒人霊歌は、実はきわめて高度な知的（レ）トリックを秘めたものだった。

①

I

②

II

③

III

④

IV

⑤

V

問2

空欄

X

・

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は

18

・

19。

X

① 非社会的

② 非人称的

③ 非親和的

④ 非排除的

⑤ 非抑圧的

Y

① 隠喩

② 不可視

③ 恐怖

④ 抵抗

⑤ 虚無

18

19

問3

傍線部(1)「このヨーロッパ精神の崩壊が、母なるアフリカ大陸から引きはがされた新大陸黒人奴隷たちの精神に適用できない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 既存の秩序の崩壊に際して経験されたヨーロッパ人のアイデンティティの空白は、アイデンティティを獲得できなかった黒人奴隷たちの状況と同様だということ。
- ② 終末的な無秩序の中で生じたヨーロッパ人の精神的危機と、故郷を奪われ自己同一性の安定を否定された黒人奴隷たちの精神状況とは類比的に捉えられるということ。
- ③ 世界大戦の結果秩序の世界を信じられなくなったヨーロッパ人の精神的立場は、故郷を失って新大陸に連れてこられた黒人奴隷の精神をよく代弁するものだということ。
- ④ 人種の違いこそあれ、同じ人間である以上精神の点で大きな違いはなく、終末的状况でのヨーロッパ人の精神的危機と黒人奴隷の精神的状況は同じであるということ。
- ⑤ 断片を蒐集することで世界を再構築しようとするヨーロッパのマニエリスムの終末精神は、常に自己の生の終末の恐怖と闘って生きた黒人奴隷の精神と通じるということ。

問4

傍線部(2)「未来は常に終末に、生は死に結び付けて表現される」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 黒人奴隷の精神は対極的な二つの焦点に引き裂かれた状態にあり、未来や生をリアリティをもって具体的に想像しようとする。常に終末や死のイメージを必要としたから。
- ② 安定した中心的概念を保有できない状態にあった黒人奴隷たちにとって、対極にあるイメージは矛盾関係にはなくむしろ世界のバランスを維持するために必要であったから。
- ③ アフリカ由来のアメリカ人という矛盾した自己意識を生きなければならなかった黒人奴隷たちにとって、世界は対立するものが恒常的に併存するものとしてイメージされたから。
- ④ 抑圧され、常に死の恐怖とともに生きていた黒人奴隷たちにとって、生きることが常に死を意識することであり、未来を想像してもそこには終末のイメージしかなかったから。
- ⑤ マニエリスムを信奉する黒人奴隷たちの精神にとって、正と負に分極化したイメージを一致させることが重要であり、未来と終末、生と死は矛盾した概念ではないから。

問5

傍線部(3)「嘘をつくことは必ずしも悪ではない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 最も忌避している自分の死の可能性を日常的に感じて生きている黒人奴隷たちは、生き残るために韜晦と秘匿を戦略的に選択したから。
- ② 危機的状況においてはなによりも自分自身を守る必要があり、そのために相手の視野を遮って密かに行動することは道徳的に責められることではないから。
- ③ 内心の思いをそのまま行動に表せば死の危険にさらされる黒人奴隷たちの立場を考えれば、嘘をついてでも生き残ろうとする戦略を非難はできないから。
- ④ 常に死の危険と隣り合わせの生活では、外面を取り繕って抑圧者を騙し、内心を韜晦して自己の人間性を守ることが生き残るために必須だったから。
- ⑤ 抑圧者の目に留まって殺されるのを避けるため、自己の存在や行動を隠匿しようとする黒人奴隷たちの行為は、相手に勝つために必要な戦略だったから。

問6 本文の内容に一致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① マニエリスムとは、既存の秩序が崩壊し、個々の事物が繋がりを失って浮遊する状況のなかで、それらの事物をもう一度統合して秩序を与えたいという欲望に基づいた芸術である。
- ② 本来の民族共同体から引き離され、言葉もよく通じない場所で暮らさざるを得なかった黒人奴隷たちにとって、靈歌は共通の言語として共同体意識を培うものだった。
- ③ 「楕円幻想」とも言われる二重化された意識を自己のアイデンティティとして背負った人間は、必然的にマニエリスムへの共感を通じて重要な業績を挙げるようになる。
- ④ 抑圧されていた黒人奴隷たちにとって本心を偽ったり仲間内でしか理解できない言い方で意思を通じ合ったりすることが、抑圧への対抗手段として共有されていた。
- ⑤ 黒人奴隷たちの歌は、秘められた意味を背後に含んで奴隷制のない地域への脱出に役立てられただけでなく、傷つけられた自分たちの魂を癒やすものでもあった。

第三問 以下の問いに答えよ。

問1 次の文の「とも」と同じ用法のものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **24**。

何はなくとも音楽さえあれば楽しむことができる。

- ① レストランで注文したのは二人とも同じメニューだった。
- ② いかにも上司であろうとも、その言い方は看過できない。
- ③ もちろん良いとも、私に任せておきなさい。
- ④ 外見だけでは動物とも植物とも判断できない。
- ⑤ 愛情はともすれば支配欲に変わってしまう。

問2 間違った漢字を含む文を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **25**。

- ① 自由を謳いながら規制するのは二律排反である。
- ② 仕方なく面従腹背の姿勢でやり過ごす。
- ③ 町の雑踏の中を歩きながら被写体を探す。
- ④ 東京は湿度が高く蒸し暑い日が続いている。
- ⑤ スポーツ観戦に興じる群衆を横目に家路を急ぐ。

問3 A・Bの外来語とその訳語の組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 26・27。

A 26

- ① カタルシス―浄化
- ② サマリ―概要
- ③ サブリミナル―識閾下刺激
- ④ モラトリアム―猶予
- ⑤ アシンメトリー―対称

B 27

- ① オーセンティック―正統的な
- ② ファナティック―熱狂的な
- ③ リアリティック―現実的な
- ④ ドメスティック―攻撃的な
- ⑤ ペシミステイック―厭世的な

問4 次のX、Y、Zの漢字と読みの組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 28 ～ 30。

Z

30

⑤	④	③	②	①
白耳義	葡萄牙	和蘭	印度	波斯
—ベルギー	—ポルトガル	—オランダ	—インド	—スペイン

X

28

⑤	④	③	②	①
暗誦	常体	外郎	硝子	混淆
—あんしょう	—じょうたい	—げろう	—がらす	—こんこう

Y

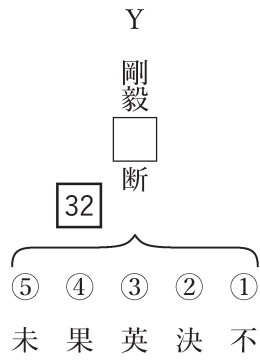
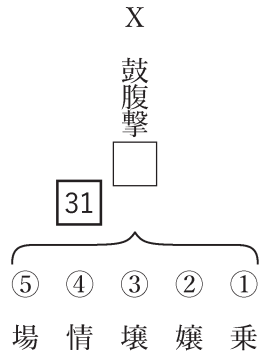
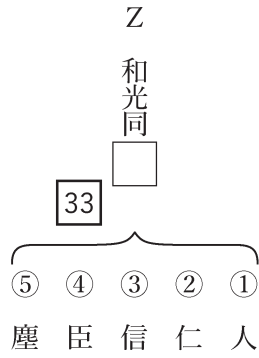
29

⑤	④	③	②	①
統率	代償	要衝	勸請	簡略
—とうそつ	—だいしょう	—ようしょう	—かんせい	—かんりやく

問5

次のX、Y、Zの四字熟語の空欄を補うのに最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

31
33



問6 次の熟語の意味として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

復命

- ① 上位に立つ者の命令にしたがうこと。
- ② 間違いないように繰り返し返し命令すること。
- ③ 命令の内容を確認するため復唱すること。
- ④ 命令されたことの次第を報告すること。
- ⑤ 確実に命令を遂行するように念を押すこと。

問7 慣用句の使い方として正しくないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 協力を要請したのに、相手からは木で鼻を括ったような返事しか来なかった。
- ② せっかく代表選手に選ばれたからには何か爪痕を残して帰りたい。
- ③ 善意で紹介したことがかえって迷惑をかける結果となり、立つ瀬がなくなった。
- ④ 選挙公約を反故にした政治家は、次の選挙で落選させて制裁を加えるべきだ。
- ⑤ 道行く人が目引き袖引き笑っていたのは、私の格好が変だからだろうか。

問8 作家と作品の組み合わせとして正しくないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 田山花袋 — 『田舎教師』
- ② 吉川英治 — 『宮本武蔵』
- ③ 菊池寛 — 『恩讐の彼方に』
- ④ 大江健三郎 — 『飼育』
- ⑤ 武者小路実篤 — 『大津順吉』

正 答 表

入試区分： 一般B日程入試

科目： 国語

問題番号	正 答	問題形式	備考
1	2	一問一答	
2	1	一問一答	
3	5	一問一答	
4	4	一問一答	
5	5	一問一答	
6	2	一問一答	
7	5	一問一答	
8	4	一問一答	
9	6	一問一答	
10	1	一問一答	
11	5	一問一答	
12	3	一問一答	
13	4	一問一答	
14	4	一問一答	
15	2	複数組み合わせ順不問個別	
16	6	複数組み合わせ順不問個別	
17	5	一問一答	
18	4	一問一答	
19	5	一問一答	
20	2	一問一答	
21	3	一問一答	
22	4	一問一答	
23	3	一問一答	
24	2	一問一答	
25	1	一問一答	
26	5	一問一答	
27	4	一問一答	
28	3	一問一答	
29	2	一問一答	
30	1	一問一答	
31	3	一問一答	
32	4	一問一答	
33	5	一問一答	
34	4	一問一答	
35	2	一問一答	
36	5	一問一答	